

## しまねの地域振興研究分科会(石東地域の地形・地質に関する地域貢献)

渡 邊 農  
○三 谷 貢  
○井 上 真

### 1. はじめに

本分科会は島根の豊かな自然景観、とりわけ世界遺産のある大田市の海岸地形に着目し昨年  
から活動をしてきた。昨年は大田市東部を主な研究対象としたが、今年は銀の積出し港であっ  
た仁摩町鞆ヶ浦に舞台を移し海岸地形による地域振興を考えることとした。

### 2. 活動

#### (1)概要

- 10月22日：食事と観光遊覧をするため予約を入れていた仁摩町馬路にある民宿「鞆の銀  
蔵」（とものかなぐら）へ12時にメンバー集合（計3名：少し寂しい）。  
観光遊覧後、鞆の銀蔵で食事をする。その後、仁摩町内の崖地形を踏査。
- 12月1日：仁摩町大国まちづくりセンターの尾川センター長を訪ね、大国地区の地形地質  
的魅力、観光資源、学習の題材について意見交換を行った。

#### (2)観光遊覧

遊覧船は、鞆の銀蔵が主催し鞆ヶ浦港から漁師さんが普段使っている伝馬船(写真-1 最大乗船  
定員4名)により、天目洞(写真-2)、親子亀(写真-3)、明神の大ダルマ(写真-4)等の奇岩を巡る所  
要時間30～40分のツアーである。波が比較的穏やかな5月から9月中旬までがシーズンで、  
乗船代は一人2,000円(2～3名で乗船の場合)である。



写真-1 遊覧船



写真-2 天目洞



写真-3 親子亀



写真-4 明神の大ダルマ



図1 大田市仁摩町馬路周辺の特異な海岸地形位置図 S=1:25,000 地形図温泉津、仁摩

**(天目洞)**

天目洞は、尾根の先端部に貫通した高さ5~6m、幅3m程度の海食洞であり、遊覧船はここを通過する。地質は新第三紀中新世の流紋岩質の火山礫凝灰岩である。

**(明神の大ダルマ)**

海面から3~4m程度の高さに位置する平坦地に崩落した岩塊と思われる。平坦地の下に

は階段跡があり、漁師さんによると以前はこの平坦地で祭りが行われていたそうである。岩塊にはのみで削った跡が残されているそうである。

#### (親子亀)

子亀が親亀の背中を上っていく様に見えるほのぼのとした海食地形である。

#### (3)食事

鞆の銀蔵で1,200円の定食(写真-5)を食す。メニューはボベ飯、刺身、ごま豆腐、お吸物(ニナ、亀の手)、あらめ、煮物。食事をしながら鳴き砂で有名な琴ヶ浦の眺望も楽しめます。(写真-6)(私のおすすめは磯の香りがたっぷりのボベ飯と貝のお吸物で、まさに絶品です。是非1度ご賞味下さい。)

#### (参考)ボベについて

「秘密の県民ショー」でご覧になった方もいると思うがボベを食するのは島根だけらしい。このことも大変驚きであるが、テレビ放映の反響は絶大でわざわざボベ飯を食するために訪れる客、しかもリピーターもいるとのことである。県内からの訪問客は、子供の頃の懐かしい味を思い出しに、県外からの訪問客は島根でしか食べられない珍しい味に接したいという思いで。ちなみに鞆の銀蔵は宿泊施設もあるので利用客について聞いたところ意に反して関西や山陽方面より関東からのお客さんが多いとのこと。

ボベはもちろん養殖ではなく天然物である。私の経験からするとボベの採取はそんなに簡単ではない。少し波があるとずぶ濡れになるシテトラの下などに生育したものは採取に苦勞する。要するに数を確保するのは容易ではないはずである。お店の人に伺ったところボベは地元の人に頼んで採取してもらい一定以上の数は冷凍保存で確保してあるとのこと。



写真-5 鞆の銀蔵の定食



写真-6 カウンター前面の眺望

#### (4)仁摩町の崖地形観察

仁摩町大国地区にある特異な地形である龍巖山と八千矛山大国主神社背後のみこもり穴を訪ねた。これらの成因については想像力を存分に働かせることができる。

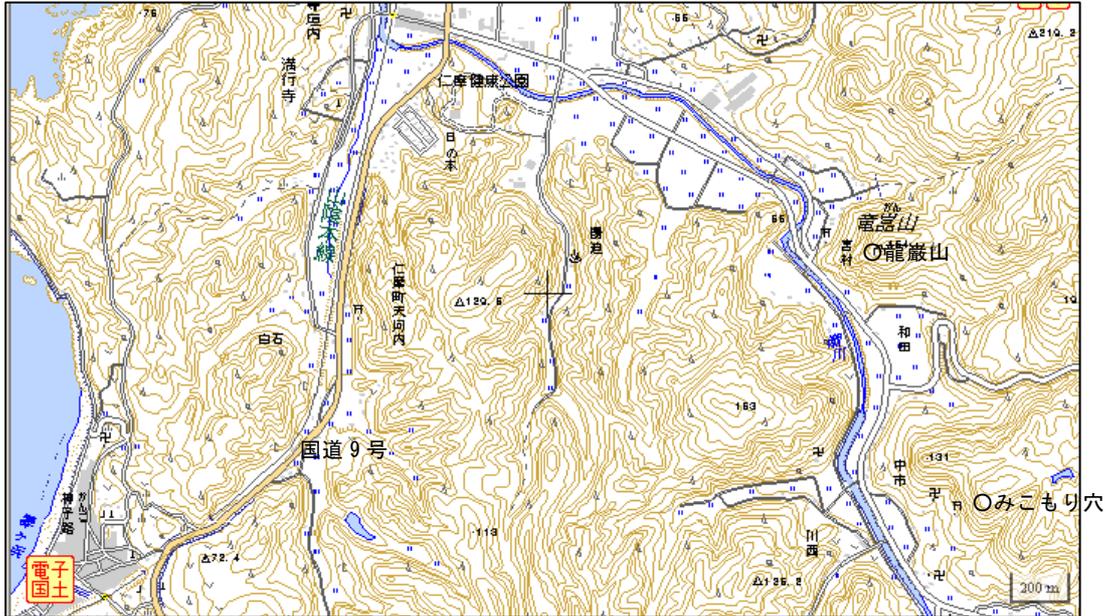


図2 大田市仁摩町大国周辺の特異地形の位置図

(龍巖山)

龍巖山は、県道仁摩邑南線（石見銀山街道）沿いの標高154mの急峻な丘陵地であり、山腹から山頂付近にかけて龍の頭を思わせる特異地形を県道から望むことができる。崖面には、町の天然記念物であるノウゼンカズラが張り付いており、訪れた時には真っ赤な紅葉がみられた。地元の人によると丘陵地一帯には龍の尾と呼ばれている地形もあり、四季により移り変わる景色を楽しんだり散策等を行って親しまれている。山頂には堀切、土塁等が残る石見城跡がある。



写真-7 龍巖山の特異地形

(みこもり穴)

みこもり穴は、巨岩が積み重なったできた隙間であり、入り口には歌碑が立てられている。歌碑には、幕末の国学者野々口隆正（後に大国隆正）の歌が刻まれているようである。

みこもり穴の背後をさらに登ると海食地形と思われる窪みのある露岩がある。



写真-8 まちづくりセンターでの意見交換

(5)仁摩町大国まちづくりセンターを訪ねて

仁摩町大国まちづくりセンターを訪ね、センター長の尾川さんと地形地質に関する地域振興について意見交換を行った。尾川さんは、大田市の教育長を務められた経験をお持ちであるため、地元の小中学生の学習題材としての価値や、関係機関との調整、学習の進め方についてご意見をお聞きした。

大国まちづくりセンターでは、自然散策の企画、実行や、島根県の埋蔵文化財調査センターと協力して山陰道建設に伴う古墳群の発掘調査等を積極的に行っておられ、身近な自然や地域の歴史に興味をもっておられる方が多いことがわかった。

### 3. 観光資源としての課題

#### (1) 海の遊覧船としての宿命

遊覧に使用する船は、洞窟や浅い湾内への進入等の航程をとるため喫水の浅い伝馬船である。波の影響を大きく受ける伝馬船のような小さな船では時化の多い期間は営業ができない。これについては大自然の摂理の影響を最も大きく受ける海の宿命であり、特に外海の日本海は瀬戸内海のような内海よりより大きく影響を受ける。波の穏やかな5月から9月中旬までがシーズンである。今年の乗船客の実数は7から9月のシーズンで月に30人程度である。尚、昼食の定食の予約人数は1日当り10から15人程度である（鞆の銀蔵からの聞き取り調査による）。

#### (2) 专业化への道

遊覧船と言えば近いところでは松江市の堀川遊覧、日御碕のグラスボート遠くは知床遊覧等水辺の観光地には必ずといっていいほど存在する比較的身近なレジャーである。その多くは定期運行である。

当日、鞆の銀蔵には県外からの来客と推測される女性のグループが先客として食事中であった。我々の遊覧の話聞き急遽予約を申し込んでいた。この時、予約を受ける店側の対応が「遊覧船の漁師さんの都合を聞いてみてから」というものであった。漁業が主な生業で観光遊覧はあくまで従であるので漁師さんの言分ももっともであるが、観光という視点から考えると定期運行がベストである。专业化は経済原則が成立つかどうか（需要と供給）がキーポイントである。1で述べたように年間を通しての安定的な需要が見込めないこと、又シーズン中でも一日中、繰返し多くの乗船客を見込めないこと等クリアしなければならない問題が多い。

#### (3) 周知方法の不備

インターネットで「鞆の銀蔵」をキーワードに検索しても又、「大田市の観光情報」と検索してもすぐに訪れてみたいという情報に残念ながら出会わない。そもそも一般の人は「鞆の銀蔵」というキーワードすら知らないであろう。

### 4. 観光活性化への提言

#### (1) 積極的かつ有効な情報発信

島根県西部は石見銀山の世界遺産登録で以前より数段知名度は上がったと考えられるが今後もよりいっそうの情報発信とりわけ観光客を呼込む仕掛けを工夫すべきである。

最も有効な情報発信方法は中央（東京）から全国に発信してもらう方法である。卑近な例を挙げるとNHKの大河ドラマ、朝ドラ（だんだんの堀川遊覧、出雲大社等）。前述したように民放であっても大きな反響を見込めることは実証されている。「秘密の県民ショー」、「B-1 グルメグランプリ」等地方を主役にしたマスメディアの番組にもっと多くアピールできないか。

少し視点が異なるが、松本清張の小説には島根を題材としたもの、しかも大作が目立つ。亀嵩が重要なキーワードとなっていた「砂の器」、事件の発端から解決まで石見銀山から松江、大

山まで舞台が移る「数の風景」他、題名は失念したが石見を舞台とした短編小説もあったと記憶している。すなわち松本清張のファンならばこれらの作品の舞台となった地を訪れてみたいと思うのではないか（中国人の観光客が北海道に多いのは中国国内で北海道を舞台としたテレビ番組が好評だったと聞く）。世界遺産登録と前後した時期にテレビドラマ化（TBS系列）や映画化された「砂時計」では仁摩町の砂時計や大森が舞台となり地元として期待もふくらんだが観光への効果はそれほどでもなかったようである。もっとも「砂時計」の視聴者は若い世代であり銀山や遊覧船観光への興味は小さいと思われるので致し方ない面もあるが。そこで提案として、朝ドラで「ゲゲゲの女房（安来に縁がある）」と映画「砂時計」で主演した松下奈緒さんを島根の観光大使あるいはイメージキャラクターとして迎えることを提案したい。端麗な容姿と少し下手な出雲弁がかえって新鮮ではないかと思うがどうであろうか？もちろん石見銀山だけでなく島根県全体として迎えることで県と関連市町村一帯となって取組むことで効果は高いと思う。

次に石見銀山観光は観光バス以外では自家用車の利用、観光タクシー等が考えられるが自家用車を利用する人のためにカーナビやスマートフォンへの情報発信・情報提供を効果的に取入れられないか。

## (2) 専門家の活用

観光振興については、効果的な情報発信や継続的な情報のメンテナンス、話題作りやファッションセンス等ハードからソフトの面まで含めたその道の専門家による洗練された振興案を作成することが重要と考える（例えば自動車のカタログ：どのメーカーのカタログもすぐにでも乗りたいと思わせるものばかりであり、社内に専門部署もあり大きな費用をかけている）。オリンピック誘致に多額の費用をかけた東京都のまねは出来ないがプレゼンとしての出来映えはさすがプロと思ったものである。

## (3) 全県一丸となつての取組み

観光振興は経済的な利益が大きな目的であるため、どうしても我田引水的な面を否定できない。しかし、1985年の阪神優勝時、当時の吉田監督が勝利インタビューで言った決り文句「チーム一丸となつて……」ではないが観光振興の取組みは全県一丸となつて取組むことでよりいっそう大きな効果があると思う。

## (4) 地域の人々の身近な自然への愛着

地形地質に関する地域振興には、まず、そこに住む小・中学生をはじめ地域の人たちが身近な山や川、海などの地形、地質等に興味や愛着を持つことが重要と思う。

われわれ技術士は、わが町探検や自然散策会等の学校行事や地域行事に参加し、地域の人々に地形地質等のすばらしさや、奥深さ、成り立ち等をわかりやすく伝えることができるのではないか。地域の人たちに知らないことを発見するおもしろさを感じてもらえれば、共通性のある地形や地質等を通じて、散策会等が隣のまちや市等へ波及し、案内書や看板を作成することで将来的に観光活性化へ繋がる可能性がある。これらの活動が、子から親また親から子へ伝わることによりスローテンポではあるが持続的な地域振興につながるのではないかと考える。

以上